

## 研究機関名：東北大学

受付番号： 2010-4/4
研究課題名 認知機能スクリーニング検査における構成障害の検出方法についての検討
研究期間 西暦 2011年1月（倫理委員会承認後）～西暦 2012年1月
対象材料 <input type="checkbox"/> 病理材料（対象臓器名） <input type="checkbox"/> 生検材料（対象臓器名） <input type="checkbox"/> 血液材料 <input type="checkbox"/> 遊離細胞 <input checked="" type="checkbox"/> その他（診療録のデータ）
上記材料の採取期間 西暦 2001年1月～2010年11月
意義、目的 「物忘れ」の症状を診察する場合、まずそれが生理的な加齢現象の一部なのかそれとも何らかの脳実質の病的変化を反映したものかを見分ける必要がある。これを調べる目的で広く用いられているスクリーニングテストのひとつが <b>Mini Mental State Examination (MMSE)</b> である。MMSEは、施行方法や検査項目が標準化されており、10分程度で施行可能なため実地臨床における物忘れ症状のスクリーニング検査として世界中で用いられている。しかし、簡略化しているために障害の存在を見落とししてしまうこともある。特に「図形模写」の課題については背景にある構成障害を十分に同定しきれない。本研究では、MMSEの図形模写課題で間違えていないにも関わらず、その後の検査で実際には構成障害があると判断されたものの特徴を調べる。この検討を通じ最終的には「物忘れ」の症状が良性的もの（生理的な加齢現象で急激には進行しないもの）なのか、悪性的もの（脳の器質的異常により出現していて進行することが予想されるもの）なのか判断するためのスクリーニング検査をより効率的に行うことにつながり、そこに本研究の意義がある。
方法 東北大学病院の診療支援システムの検索機能を利用し、2000年1月から2010年11月までの期間中に東北大学病院老年科の外来を受診した患者を連続的に抽出する。これらの患者についてカルテ調査を行い、物忘れ外来を受診した者を抽出する。この手順で抽出した患者を研究対象とし、MMSEの図形模写課題ができているにも関わらず、その後の検査で実際には構成障害があると判断されたものの背景・認知機能検査結果の特徴や画像検査（MRI、SPECT）・採血結果の差異について検討する予定である。
問い合わせ・苦情等の窓口 東北大学加齢医学研究所加齢老年医学研究分野（東北大学病院老年科） TEL: 022-717-7182 (担当) 富田 尚希